

にっぽんご (4)

日伯文化普及会

教科書刊行委員会



カナリヤ
冬休みが すんで
何でしよう
虫めがね
ようさんごや
手紙
長く のばす 音
「でん」と「まる」
おばあさん
うとぎ日記
ゆりかごの うた
お話を きく ときは
本を 読む ときは
しよくぶつえん
つづいて 思い出す ことば
くつ先生
お話を する ときは
文を 書く ときは
見た ことや した こと
フエイラ
ことば さがし
しかと オンサ
アイウエオの 話
いろはがるた
かぐやひめ

おもな ことば
今までに ならった かんじ
あたらしい かんじ
先生と 父母へ



カナリヤ

かごの 中で、カナリヤが、
なきはじめました。

おじいさんが、
かわいがって いる
カナリヤです。

ひるは、かごを 外に 出します。

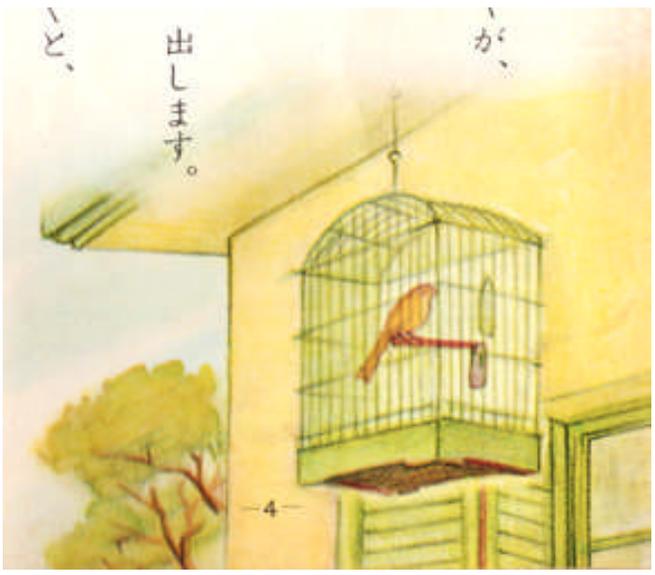
夜は、うちに 入れます。

わたしが、そばに 行くと、
なきやみました。

目を パチパチさせて、
チョン チョン とんで みせました。

そつと、わたしが
はなれると また
いい 声で、なき出
しました。

山に かえりたく
て、なくのしょうか。



冬休みが すんで

長い 冬休みが、おわりました。

みんなは、元氣よく 学校に 来ました。

久しぶりに 会ったので、あちらこちらで

たのしそうに、話し合っています。

「あら、めずらしい ブロッシェね。

ちよつと 見せてね。」

と言って、はるえさんは、いずみさんの むねに

手を のばしました。いずみさんは、

「これ、サントスで かったのよ。」

と言って、はるえさんに わたしました。

きれいな 貝がらで 作った ブロッシェです。

はるえさんは、自分の むねに ちよつと 当てて

「どづ。わたしにも にあうでしょう。」

と にごにこしました。

いずみさんは、サントスに 行った ときの

ようすを 話しました。

はるえさんは、かばんの 中から 図画を 三まい

出して

「らんこうえんで かいたのよ。」



と 言 っ て、見 せ ま し た。

そ こ へ あ き り さ ん が 来 ま し た。

あ き り さ ん は、は る え さ ん の

え を 見 て、

「う ま い な あ。

ほ く の り ず つ と う ま い。」

と 言 い ま し た。そ し て

「ほ く、ピ ッ コ ・ デ ・ ジ ャ ラ グ ア

の え を 書 い た よ。」

と 言 っ て、ジ ャ ラ グ ア の 山 を

か い た え を 見 せ ま し た。画 用 紙 い っ ぱ い に、山 が

か い て あ り ま し た。

と お る さ ん が 来 ま し た。

「あ っ、し ま っ た。

ほ く、え を か い て く る の を わ す れ た。

と 言 い ま し た

「わ す れ ん ば。」

と い ず み さ ん が 言 う と、

「だ っ て、ほ く い な か に 行 っ て い た ん だ も の。」

と 言 っ て、あ た ま を か き ま し た。



とおるさんは、冬休みの あいだ、レジストロのおじさんの うちに 行って いました。

先生が 来ました。

先生は、にこにこしながら、

「みんな、うれしそうだね。冬休みは たのしかった
かね。」

と 言いました。

みんなは、一度に いきおいよく

「はい。」

と 返事を しました。

何でしょう

家を しょって います。

ゆっくり ゆっくり、すすみます。

草木の め や 葉を たべます。

あぶない ときには、からだを

ちぢめて、しょって いる 家の

中にかくれます。

つのを のばしたり ちぢめたり

します。

歩いた あとには、白い すじが
つきます。

何でしょう。

（新漢字 度返事家草葉

008.jpg 横書き 縦表記）

虫めがね

「あつ、もえた。もえた。」

きゆうに 大きな 声を出したので、おかあさんが
びっくりして、ベランダに とんで 来ました。

「何が もえたの。」

「ほら、こんなに よく もえたよ。」

のぼるくんが、虫めがねで もやした 紙を

見せました。

おかあさんは、安心して へやに かえりました。

のぼるくんは、ざっしを見て、虫めがねの

じっけんを していたのです。

はじめ 白い 紙で

じっけんしましたが、なかなかうまくもえませんでした。

「黒い紙と、どちらが早く

もえるでしょう。」と書いて

あったので、黒い紙と

とりかえました。

すると、すぐけむりを出して

もえはじめました。

（新漢字 紙安心）

（009.jpg 横書き 縦表記）

こんどは、虫めがねで、ざっしの字を見ました。

字が大きく見えました。おもしろいので、にいさんの字引きを、そっとかりてきました。

ざっしりならんで、いる小さな字が、虫めがねで

見ると、やっぱり大きく見えました。

こんどは、にわに、出て、ダリヤの花と葉を

見ました。花びらは、あついきれのようです。

もようもはつきり見えました。そして、葉を見る

と白いすじが、ひものようです。のぼるくんは、

いろいろのものを、見て歩きました。



とおくのもの

どんなに見えるかな。

と思うって 向こうの家を

見ました。

「おや、へんだなあ。さかさに

見える。」

家も 木も でんしんばしらも

さかさに なって うつりました。

のぼるくんは

虫めがねは おもしろいなあ。と思いました。

(新漢字 向)

(010.jpg 挿絵あり)

ようせんや

ひるすぎに ぼくは、学校から かえって きました。

「ただいま。」

と 言うつと、にわに いた

おんごつんが、

「おかえり。しんぶんは。」

と 言いました。

ぼくは、かばんから



しんぶんと 手紙を 出して、
おとうさんに わたしました。

おとうさんは、手紙を 見て、

「おかあさんに 来た 手紙だ。

日本の おばさんからだよ。」

と 言いながら、家に はいって、

手紙を おかあさんに わたし

ました。

ぼくの 村に 来る ゆうびんぶつは、

毎朝、青年会の 人が 町の ゆうびんきょくから

青年会かんまで、持って きます。

会かんは、学校の 西どなりに あるので、ぼくは

(新漢字 朝 青持 西)

(011. j. pag)

かえりに いつも よります。

おとうさんは、ぼくが しんぶんを 持って かえる

のを、たのしみにして います。

しばらく すると、山田さんに、手つだいに 行って

いた にいさんが、かえって きました。

おとうさんが、

「もう すんだのか。なかなか 大きな ものだ
そうだな。」

と 言うと にいさんは

「ええ、でも 手つだいの 人が 多かったので、
ずいぶん 早く できました。山田さんが とても
よろこんで いました。」

と 言いました。

きょう、山田さんの うちで、ようさん(やの
むね)上げが あったのです。

去年、ぼくの うちで ものおきを たてた
ときも、きんじよの 人が、大せい 手つだいに
来て くれました。

その とき、れんがやの アントニオさんが 足に
けがを したと 言って、大声を たてました。

(新漢字 多 去)

(012. jpg 挿絵あり)

おどろいて かけよって 見ると、小さな かすりきず
だったので、みんな わらいました。

ぼくは、その ことを 思い出したので、

「だれも けがは しなかった。」

と にいさんに 聞きました。にいさんは、

「ああ、石川さんが、シャツを くぎに ひっかけて
やぶったぐらいだったよ。」

と言いました。

おとうさんが、

「まあ、ぶじに すんで よかったな。」

と言いました。

おかあさんが、ふかした おいもを、持って きまし
た。そして、

「おばさんから 来た 手紙の中に、あきらのも は
いって いましたよ。」

と言って、ぼくに

光一くんからの 手

紙を わたして く
れました。

(新漢字 聞 光)

(013. jpg)



手紙

光一くんから 来た 手紙

あきらくん、元気ですか。

ぼくの うちでは、みんな 元気です。

ぼくたちは、今、夏休みです。毎日 あつい日が
つづいて います。

朝六時に、ラジオたいそう会に 行きます。ぼくは、
まだ 一度も 休みません

ごごは、近くの 川に およぎに 行きます。

この あいだ、おとうさんに、東京へ つれて

いって もらいました。東京えきで 汽車を おりて、
ゆうらんバスに のりました。

こうきよ前の 広場には、たくさんの人 が けんぶ
つに 来て いました。バスから おりて、二じゆう
ばしの 前で、きねんしゃしんを うつしました。

東京タワーに のびりました。とおくの 方まで
見えました。広い 海も 見えました。

ぼくは、ブラジルも 見えると いいなあと、思い
ました。

ぎんごどおりや あそ草などにぎやかな 所にも

(新漢字 時 東京 近場 海 所)

(014. jpg 左挿絵)

行きました。

ほうぼう けんぶつして、夕方の 汽車で かえり
ました。

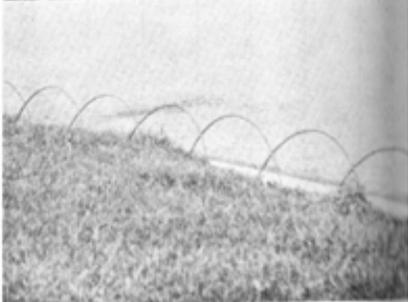
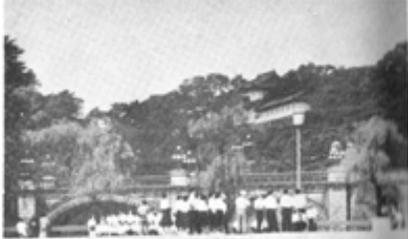
あきらくんたちの 夏休みは、いつですか。
そちらの ようすを 知らせて ください。
みなさんに よろしく。 さようなら。

八月一日

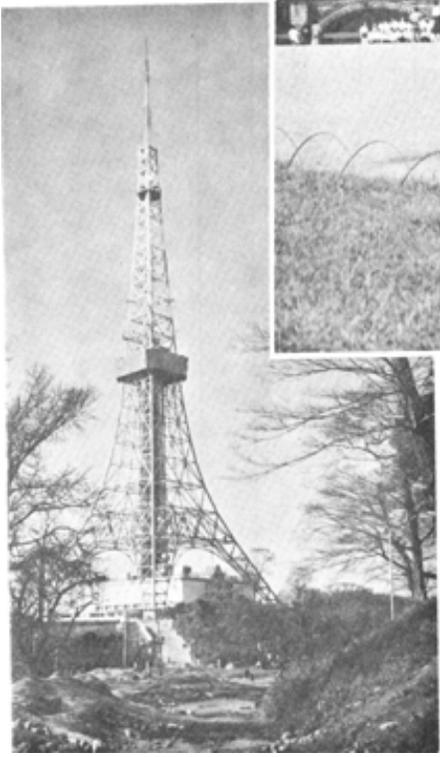
光一

あきらくん

(新漢字 方)



東京タワー



こうきよ前の
広場

あきらくんが 出した 返事

光一くん、お手紙 ありがとう。

東京タワーに のぼったそうですね。

おもしろかったでしょう。しゃしんを 見て、ぼくも

のぼりたく なりました。

ブラジルでも、大きな 町に 行くと、高い たて
ものが たくさん ありますが、ぼくたちの いる
所は、広い 広い コーヒーえんです。

コーヒーの しゅうかくも、だいたい おわりました。

ぼくが、せわを して いる にわとりも、

六十ぱぐらいに ふえました。毎日、たまごを

あつめるのが たのしみです。

ぶたも、二十二とうに ふえて、みんな よく
ふとつて います。

こちらは 七月が 冬休みで、八月から 一学き
です。

夏休みは、十二月に はじまります。

夏休みには、おとうさんが、サン・パウロけんぶつに
つれて 行って くださるそうです。

今から たのしみに して います。

光一くん、また 手紙を ください。

みなさんに よろしく。 さようなら。

あきら 八月二十日

光一くん

長くのぼす音

【にさんと ねさんは、はだけに 行きました。

わたしはいもとの おもりを しました。】

この 文には、字の ぬけた 所が あります。

なおして みましよう。

「にさん」は、「にいさん」です。

「ねさん」は、「ねえさん」です。

「いもと」は、「いもつと」です。

「に」を のぼして 言うつと、「にい」と なつて

「い」だけが のこります。

だから、「い」をつけます。「ね」を のぼすと

「ねえ」と なつて、「え」だけが のこるので、

「え」をつけます。

けれど、「も」を のぼすと「お」になるのです
が、書くときは「う」と書きます。

のぼして「お」になる 音は、たいてい「う」を
つかいます。

この 本を 見て、さがして みましよう。

のびじて「お」になっても「う」と書かないで「お」と書くものもあります。

たとえば、

おおきい・おおあめ・おおなみ・こおり・

こおろぎ・こおり・こおまわり・ほおばる

また、かたかなで書くことばで、のぼす 音は、「一」であらわします。

コーヒー・ハーモニカ・レコード・カーテン・

ポロ・シーカラ・セボラ・カジュー

「てん」と「まる」

「みなさん、この 文を 読んで べらんなさい。」
と言って、先生は、黒ばんに みじかい 文を
書きました。

ともだちとすもうをとってあせがでたからだか
らだらだらながれるようでした

わたしたちは、声を出して 読んで みました。

よしおくんが、

「読みにくいなあ。」

と言いました。先生が、

「二度に 読むと、とても 読みにくいね。」

では、どこで 切ったら いいだろう。」

と言ったので、また、みんなは 声を出して

読んで みました。

のぼるくんは、

ともだちと すもうをとって あせが でたから、

だから、だらだら ながれるようでした。

と 読みました。

はるえさんは、

ともだちと すもうをとって あせが でた。

からだから、だらだら ながれるようでした。

と 読みました。

みんなは、はるえさんの 方が わかりやすいと

思いました。先生が、

「文を 書く とき、わかりやすく するためには、

『てん』と 『まる』を つけなければ いけない。

これから、作文を かく ときは、てんや まるを、

わすれないように しましょう。」

と 言いました。

「日本の話です。ある所に会があつて、大ぜいの人があつまることになりました。入り口の所に、

【「い」からはきものをおぬぎください】

と書いた紙がはつてありました。

はじめに来た人たちはこのはりふだを見て、くつやげたをぬいではいっていきました。

次に、また四、五人来ました。はりふだを見て、

『やれやれ、ここできものをぬがなければ

いけないのか。』とびっくりしました。」

先生の話が おわつて、みんなは、

「てん」や「まる」がないと、まちがいがおこるものだ、と 思いました。

ふたえにしてくびにかけるじゆず

ふたえにして、くびに かける じゆず。

ふたえにして、くびに かける じゆず。

(新漢字 次)

おばあさん

レーデに かけて

おばあさん、

わたしの カザキニヨ

あんです。

かきねの きれいな

アラマンダ、

行ったり 来たり

はちすずめ。



かきねの きれいな
アラマンダ、
行ったり 来たり
はちすずめ。

おばあさん
レーデに かけて
おばあさん、
わたしの カザキニヨ
あんです。

こっくり こっくり
おばあさん、
どこかで ベン・テ・ビー
なっています。



11065 11065

おほあきん

どこかで グン・テ・ビー

なっています。

うさぎ日記

九月十日 土よう はれ

ぼくは、おじさんのうちから、うさぎを二匹もらって、きました。おすとめすの、白いうさぎです。

おとうさんに、トマテの あきばい、うさぎの家を作って もらいました。

ぼくは、草をとって、きて

しいて やりました。

これから 毎日、ぼくが、

うさぎの、せわを、するのです。

(新漢字 記)



(022. jp as)

九月十一日 日よう はれ

朝、うさぎを、見に行きました。

一匹は、金あみに、前足を、かけて、いました。

一ぴきは、おくの方で
まるく なって いました。
にんじんの 葉を 入れて
やると、二ひきの うきぎは、
あたまを くつつけて、
おいしそうに たべました。



九月十五日 木よう はれ

うきぎは、すっかり ぼくを おぼえました。
きょうは、はこの 中を、きれいに そうじして
やりました。

は「から うきぎを 出す とき、耳を つかんで
ぶらぶらけました。そばに いた おとうさんが、
「マリオ、耳を つかんではいけないよ。」
と 言いました。ぼくは、うきぎを だいて、にわに
おろして やりました。うきぎは よろこぶ。
ピョンピョン はねまわって いました。

(023. jpg 挿絵あり)

九月二十四日 土よう くもり

学校から かえると、いつもの ように、すぐ

うなぎの 所へ 行きました。

めすの うなぎが、はこの すみに 草を あつめて
いました。自分の 毛を むしって、草の 中に入
れて いました。ぼくは、おとうさんに その ことを
話しました。おとうさんは、

「うなぎは、子を 生むので、その したくを して
いるのだよ。」

と 言いました。

「うなぎの 子は、いつ 生まれるの。」

「そうだね、一しゅう間ぐらい たつと、

生まれるだろう。」

「何びき 生まれるの。」

「まあ、二びきか

四びきだろうね。」

ぼくは 子うなぎが

生まれる 日を たのしみ

に して います。

(新漢字 間)

ゆりかごの うた

(1) ゆりかごの うたを、

カナリヤが うたうよ。

ねんねこ ねんねこ

ねんねこよ。

(2) ゆりかごの 上に、

びわの み が ゆれるよ。

ねんねこ ねんねこ

ねんねこよ。

(3) ゆりかごの つなを、

きねずみが ゆするよ。

ねんねこ ねんねこ

ねんねこよ。

(4) ゆりかごの ゆめに、

黄色い 月が かかるよ。

ねんねこ ねんねこ

ねんねこよ。



お話を 聞く ときは

○ みんなと いっしょに、なかよく
聞きましょう。

○ よい しせいで、しずかに 聞きま
しょう。

○ お話をする 人の、かおを 見て
聞きましょう。

○ 長い お話でも、おわりまで 聞き
ましょう。

○ わからない ことが あったら、
あとで たずねましょう。

□ 聞いた お話を、ほかの 人にも
話して あげましょう。

本を 読む ときは

○ よい しせいで、読みましょう。

○ ていねいに、ページを めくりま
しょう。

○ 書いて ある ことが よく わかる

まで 読みましょう。

○ 長い お話でも、おわりまで 「こんき
よく 読みましょう。」

○ さしえは、お話の どこが かいて
あるのか 気をつけて 見ましょう。

□ 読んだ ことを、みんなに 話して
あげましょう。

□ 本や ざっしなども、どンドン
読みましょう。

(026. jram)

しよくせんが、

日よう日の 朝でした。

こいせんが、

「きよちんが、しよくせんが、こい
せんが、いって あげよう。」

と 言いました。

「わあ。うれしい。」

みち子さんを ちよつても



「はい。」

と聞くと にいさんは

「ああ、いいよ。ほかの 人も さそって おいで。」
と言いました。

わたしは、みち子さん、ひでおさん、エレーナさん、
はるみさんを さそって いっしょに 行きました。

しよくぶつえんの 池には、

シスネが およいで いました。

わたしたちは、池の まわりを

歩いて いきました。

にいさんに、木や 花の 名を

(新漢字 池)

(027. jpg 挿絵あり)

おしえて もらいました。

まっかな スイナンの 花。

黄色い アラマンダの 花。

それから パウ・ブラジルも ありました。

大きな まつの 木の 下で、

みちさんが、まつ葉を ひろい
ました。



「あらこの まつ葉 三つ葉だ

わ。」

と、びっくりしたような 声を出しました。

にいさんが、

「これは、大王まつと 言って、三つ葉なのだよ。」

と言うと、ひびおさんが、

「じゃあ、まつの 王さまですわね。」

と言いながら、まつの 木を 見上げました。

池の 中に、小さな 島が あって はしが かけて

ありました。

わたしたちは、島に わたりました。

木の 下で ひと休みしました。

(新漢字 王 島)

(028. jpg 挿絵あり)

島の 水ぎわに、木の こぶが、たくさん 出て

いました。

たこぼろが ならんで いるようでした。

「これ なあ。」

ときくと、にいさんは

「この ぬますぎの 根なんだ

よ。ぬますぎは、ハダカ

土の上に出しているの
で、じめじめした所でも
平気なんだ。根がくさ
らないからね。」

とおおして くれました。

それから、わたしたちは 広場

に行きました。みんな

おにごっこを しました。

かえる とき、「たび人の 木」の

前に、みんな ならんで、

にいさんに しゃしんを

うつして もらいました。

(新漢字 根)



それから、わたした
に 行きました。みん
おにごっこを しまし

かえる とき、「たび
前に、みんな ならん
にいさんに しゃしん
うつして もらいまし



しづいて 思い出す ハジメ

先生が、黒ぼんに

「おかあさん。」

と 書きました。そして、

「おかあさんと しづい ハジメから、

しづいて 思い出す ハジメを、

書いて みましよう。」

と 言いました。

よしえさんは、

「おかあさん — せんたく —

せつけん — あわ —

しやぼんだま — ふうせん

— ナタール」

と 書きました。

のぼるくんは、

「おかあさん — かいもの —

みせ — まち — 自家用車

— でん車 — ひろびき」

と 書きました。



先生が、

(030. jpeg)

「はい、やめて。

今、書いたものを、ひとりずつ 読んで ください。」

と言いました。

マリオさんから じゆんに 読みました。

同じ ことばで 書きはじめたのに、おわりは

めいめい ちがう ことばに なって いました。

たくさん 書けた 人も あるし、三つしか 書けない

人も ありました。先生が、

「花。」

と 黒ぼんに 書きました。

みんなは、また つぎつぎに 思い出す ことばを

書いて みました。

【いろはにほへとちりぬるを

わかよたれそつねならむう

いのおくやまけふこえてあ

さきゆめみしえひもせずん】

(新漢字 同)

くつ先生

ぼくたちの 学校の となりに、おいしやさんが
すんで います。一年ほど 前、サン・パウロから
この 町に 来たのです。

おいしやさんは、来て まもなく、ぼくたちの
学校で お話を しました。

それは、十二しちよう虫の お話でした。この 虫は、
おなかの 中で、血を すって 生きて います。

この 虫が いると、からだか やせて、かおが
黄色く なります。それで、この びよう気を

アマレロンと いうのです。

いなかでは、土の 中に、この 虫が たくさん
います。はだしで 歩くと、足から はいりこんで
きます。

「だから みなさんもはだしで 外を 歩いては
いけません。かならず、くつを

はいて、ください。」

と、おいしやさんは 何げんも
言いました。



おいしゃさんのははだしの

(新漢字 虫 血 生)

(032. j p a s s)

子どもを 見るよ、きいよ、

くつをはいて おいで。」

と言います。

いつも そう 言うので、ぼくたちは、

「くつ先生。」

とよんで います。「くつ先生」は、やさしい 先生

で、ぼくたちを かわいがって くれます。でも、

はだしで いるのを 見つけると、たいへんです。

「くつを はけ。」

とすぐ しかります。

きのう、学校から かえる

と中の ことでした。

あまり あついで

ぼくたちは、くつを めいで、

小川に はいりました。

川から あがって、

はだしのまま

歩き出しました。



少し 行くと、向こうから
「くつ先生」が 来ました。

(新漢字 小)

(033. jpg 左 pg横書き。)

「うわあ、くつ先生だ。しかられるぞ、にげろ にげろ。」
ぼくたちは、あわてて にげました。

「まって まて。」

と、先生は おいかけて きました。ぼくたちが

ふり向くと、先生は 立ち止まって、

「はだしは だめだ。くつを はけ。」

と となりました。

ぼくたちは、くつを はきました。

それを見て、先生は にっこりして、かえって

いきました。

お話を する ときは

○ よい しせいで、おちついて

話しましなう。

○ みんなに わかるように、はっきりと

話しましょう。

○ はずかしがらないで、話しましょう。

○ 聞いて いる 人の 方を 見ながら、
話しましょう。

○ じゅんじょよく、わかりやすく
話しましょう。

(新漢字 止)

(034. jpg 右 pg 横書き。)

文を 書く ときは

○ 書く 前に、何を 書くか

きめましょう。

○ 書く ことが きまったら、その

ときの ありさまを くわしく

思い出しましょう。

○ 思い出した ことを、じゅんじょよく

書きましょう。

○ よい しせいで、字を

ていねいに 書きましょう。

○ てんや まるを、わすれないように

書きましょう。

見た ことや した こと

みじかい 文を書く けいこを しましろう。

家や 道や きょうしつなどで みなさんが

見た こと、聞いた こと、思った ことを、

そのまま 書けば よいのです。

目にとまった こと、考えついた ことを、すぐ

書き止めて おきましょう。

○

向こうに、屋根が 見える。

日が 当たって 光っている。

(新漢字 道考屋)

(035. j p a g)

○

ありがとう、きょうれつを して いく。

きちんと ならんで、ひものようだ。

○

サーラに、おじいさんの かおの 絵がある。

いつも、ぼくの方を 見ている。

○

いたの あいだに、フレイジョンが、一つぶ

はさまっています。

じっとがまんして いるようです。

○

かべの 上の方、しみが あります。

ねこのような 形を しています。

○

紙くずが、おちて いた。風が ふいて きたら、
くるくると まわって 走って いった。

○

大きな 木と、小さな 木と、ならんで 立って いる。

風が ふくと、大きな 木が、手を ひろげて、

小さい 木を かかえて やります。

(新漢字 絵)

(036. jpg)

フエイラ

わたしの 家の 近くで、

毎しゅう 水よう日に フェイラ

が あります

けさ、わたしは 早く おきて、

おかあさんと フェイラに 行き
ました。わたしも、サツコーラを
もって 行きました。

フェイラには、もう 人が
いっぱい いました。

いつものように いろいろな 店が ならんで
いました。

やさい・くだもの・お米・

かんづめ・おかし・にく・

ペイシエ・せともの・花・

ようふく・おもちゃ・くつ

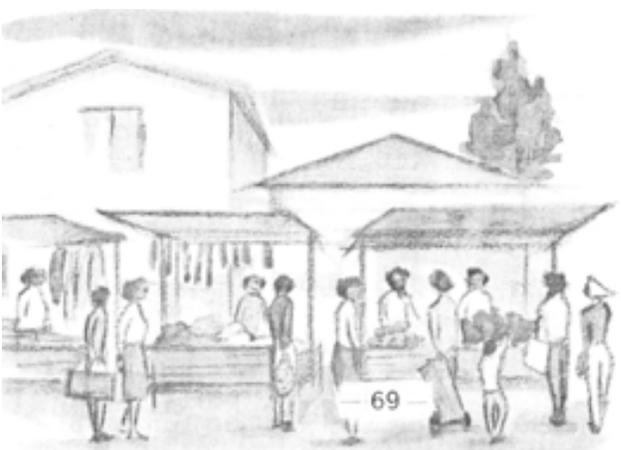
など 何でも ありました。

売る 人は 大きな 声で、

おきやくを よんで いました。

わたしたちは、はじめに

(新漢字) 店 米 売



(037. jpg)

マカロン・ケイジヨ・マンテイガなどを 買いました。

買いものを しながら、フェイラを ひとまわり

して、しまい に くだものを 売って いる 所に

来ました。そこには、いろいろな くだものが ありま

した。

みかん・すいか・マモン・なし・りんご・びわ・
もも・アバカシ・いちご・バナナ

みんな おいしそうです。おかあさんは、みかんと
アバカシを 買いました。

わたしの サツコーラも、いっぱいになりました。
おかあさんが、

「あら、もう ジャボチカーバが 出ている。

めずらしいわね。」

と言いました。

「おかあさん、わたしに 買ってよ。」

と言いつつ、

「そうね、けんちゃんにも あげるのよ。」

と言いながら、買って くれました。

わたしたちは、いっぱいになった サツコーラを
持って かえりました。

(新漢字 買)

「ことば」さがし

よこの もんだいと

たての もんだいを、

よく 読んで、

上の

あいて いる

所に、

ことばを

入れましょう。

(上段)

たての もんだい

1、この 本の 名まえ。

2、白くて あまい もの。

3、きょうの 前の 日。

4、一つ二つ三つ四つ

の 次。

5、わたしたちは、これで

歩きます。

6、パイと ママイ。

7、とけいが おしえて

くれる もの。

1 8 に		2			5 あ	
					6	
		10 う		4		9 や
11 こ		3		12 つ		7 じ
		の				
		13				ん

- よこの もんだい
8、きょうたいで、自分より 年上の 人。
9、白くて、からい もの。
10、あついの はんたい。
11、2ひきと 3ひきと あわせた かず。
12、にわに さく 花です。つが つづいて います。
13、かめと かけっこした、耳の 長い
ぶつぶつ。

(039. jpas)

しかと オンサ

一ぴきの しかが いました。

しかは、自分の 家を

たてたいと 思いました。

あちら こちら、家を たてる

場所を、さがして 歩きました。

しかは、たいへん よい 場所を 見つけました。

日当たりが よくて、すずしい 風の ふく 所

でした。近くに、きれいな 川も ながれて いました。

「とても いい 場所だ。ここに 家を たてよう。」



しかは、すぐに 草を かり取って、地ならしを
しました。

夜に なったので かえって いきました。

一ぴきの オンサが いました。

オンサは、自分の 家を

たてたいと 思いました。

オンサは、家を たてる

場所を、さがして 歩きました。

たいへん よい 場所を 見つけました。

(新漢字 所 取)

(040. jpg)

それは、前に しかが 見つけた 所でした。

「これは いい 場所だ。それに、だれかが ぼくの

ために、地ならしまで して くれた。

ありがたいなあ。」

オンサは、よろこんで、そこに れんがを はこんで

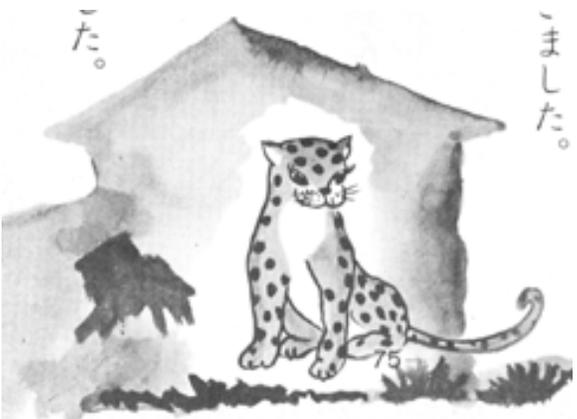
きました。

夜が 明けたので、オンサは かえりました。

朝、しかが やって 来ました。

「おや、だれか もう れんがを はこんで

くれたぞ。ありがたいなあ。」



しかは れんがを つんだり、まどを 作ったり
しました。そして、夕方 かえって いきました。

夜に なって、 オンサが 来ました。

「だれが、ぼくの 手つだいを して くれるんだろ
う。もう れんがが つんで ある。うれしいなあ。」

オンサは、たいそう よろこんで 屋根を
作りました。

夜明けに 屋根が でき上がったので、オンサは

(新漢字 明)

(041. jpeg)

かえりました。

朝、しかが 来ました。

夜の うちに、屋根が できて いるので、びっくり
しました。

「だれが、こんなに たくさん

手つだつて くれるんだろう。

すまないなあ。」

ぼくも うんと はたらくぞ。」

しかは、せつせと かべを ぬりました。

入り口や まどの 戸も つけました。一生けんめい

はたらいたので、夕方までに すつかり 家が でき
上がりました。しかは 大よろこびで、家に はいって
ぐっすり ねむって しまいました。

夜に なって、オンサが 来ました。

でき上がった 家 を 見て、

とび上がって よろこびました。

「仕上げまで 手つだって くれた。

ありがたい。ありがたい。」

(新漢字 戸 仕)

(042. jpg)

オンサは、にこにこしながら、家の 中 に、はいり
ました。

見ると そこに、だれか ねて いました。

オンサは、大声で どなりました。

「きみは だれだ。これは ぼくの 家だ。

出て 行って くれ。」

しかは、おどろいて とびおきました。そして

大きな 声で 言い返しました。

「きみこそ だれた。これは ぼくの 家だ。

早く 出て 行って くれ。」

これを きいた オンサは、かんかんになつて
おこりました。

「これは ぼくの 家だ。ぼくが たてたんだ。」
しかも、かんかんになつて おこりました。

「ぼくが たてた 家だ。ぼくの ものだ。」

しかと オンサは、たがいに 言いはりました。

言いはつて いるうちに、とうとう 夜が 明けました。

しかと オンサは、話し合つて、この 家で

いつしよに くらす ことに しました。

ひるが すぎて、夜が 来ました。

(新漢字 返)

(043. jpas)

しかと オンサは、ねどこに はいりました。

しかは ねむつて しまつと、オンサに かみつかれ

は しないかと 思いました。

オンサは、ねむつて いる あいだに、しかに つの

で つかれは しないかと 思いました。

しかと オンサは、ねむい 目を こすりこすり、

一ばん中 ねむらないで いました。

夜が 明けると すぐしかと オンサは、

べつべつの方、走つて にげて いきました。

アイウエオの話

(上段)

【アイウエオ】

カキクケコ

サシスセソ

タチツテト

ナニヌネノ

ハヒフヘホ

マミムメモ

ヤユエヨ

ラリルレロ

ワイウエヲ】

(下段)

むかし、あるところに、アイウエ

王という王さまがいました。

その王さまの国は、カキクケ国

と、いいました。

たいへんよい国で、みんな

たのしくくらして、いました。

その国に、サシスセそうと、いう

ぼうさんが、いました。



その ぼうさんはいつも

(新漢字 国)

(04. jpg 挿絵あり)

タチツテとうと いう とうの 中で
学もんを して いました。

何でも 知って いる えらい
ぼうさんです。

タチツテとうは 広い 広い
ナニヌネ野と いう 野原の まん
中 にあります。

タチツテとうは 国中が すっかり
見えるような 高い とうです。

タチツテとうの 一ばん 上には、
ハヒフへほうそうきよくが あります。

そして、いつも きれいな 音楽や、
おもしろい お話を ほうそうして
いました。

ずっと 前には、ラリルレろうと
いう ろうやが ありましたが、
わるい ことを する 人が いなく



なったので、ラリルレろうは 取り
こわされて しまいました。

アイウエ王さまの しろには、
(新漢字 原 薬)

(045. jpg 挿絵あり)

マミムメ門と いう 大きな 門が
ありました。門は いつも あいて
いて、だれでも しろに はいる
ことが できました。

アイウエ王さまに、かわいい
ワイウエ王子が 生まれました。

王子は、サシスセそうに ついて
べんきょうしました。

ワイウエ王子は、りつぱな 青年に
なりました。

なかよしの となりの 国から、
ヤイユエヨひめが およめさんに
来ました。

その 日には、マミムメ門に 二つ
の 国の はたを 高く あげました。
ハヒフへほうそうきよくから、



おいわいの 音楽を ほうそう
しました。二つの 国の 人たちは、
その 音楽を 聞きながら たいそう
よろこびました。

(新漢字 門 子)

(046. j p g)

いろはがるた

きみえさん、ローザさん、マリオくん、ただおくん
たちは、いろはがるたを 作る ことに しました。

ひとりで 作るのは たいへんですが、みんなで
そうだんしながら 作ると、やさしく できます。

い いつも にこにこ 元気な 子。

さっそく きみえさんが 作りました。

ろ……………

「ろ、ろ……………」なかなか よい 考えが、出て
きません。

ろ ロケットは 月まで とんだ。

ろろそくの 火が ゆらゆら。

やっと、二つだけ できました。そうだんして、

ローザさんの 考えた、

ろうそくの 火が ゆらゆら。

に きめました。

次は、は です。はは、すぐ ただおくんが
作りました。

は はさみで チョッキン とこやさん。

には、マリオくんが 考えました。

(047. jpg)

に にじの 色は きれいだな。

ほ、へ、と、ちり と、おもしろいように できま
した。

だいぶん 時間が かかりましたが、字ふだを 全
作りました。それから 絵ふだも 作りました。

みんなで、かるた取りを しました。

つ 月の せかいに 行きたいな。

や やさしい 先生 大すきよ。

ふ ふろくの 工作 おもしろい。

み みんな なかよく かるた取り。

むかし、あるところに、「竹取りのおきな」というおじいさんがすんでいました。

ある日、おじいさんはいつものように山へ竹を切りに行きました。

「さて、きょうはどれから切ろうかな。」

とあたりを見回しました。

すると、根もとがピカツと光っている竹が一本ありました。

おじいさんは、その竹を切ってみました。

(新漢字 全工)

(048. jpg 挿絵あり)

竹の中に、女の子がいました。

おじいさんは、その子をとつと、手のひらにのせました。

「これはきつと、神さまがわたしたちにくださった子にちがいない。早く

見せて、おばあさんを

よろこぼせて あげよう。」

おじいさんは、その 子を、

ふところに 入れて かえり

ました。

「まあ まあ。かわいい

女の子。」

と、おばあさんも たいそう

よろこびました。

たいへん 小さいので、

かごの 中に 入れて

そだてる ことに しました。

(049. j p 2)

それから のち、おじいさんの 切る 竹の 中には、

いろいろな たからものが はいって いました。

おじいさんは だんだん 金持ちに なりました。

女の 子は、ずんずん 大きく なって、三月ほど

たつともう すっかり ふつうの 人の 大きさに



なりました。

かおも すがたも美しくて、いつも かがやいて
いました。この 子が いると、家の すみずみまで
明るく なりました。

おじいさんと おばあさんは

「かぐやひめ」と いう 名を つけました。

「やさしくて、かがやく かがやひめ。」

「かしくくて、美しい かがやひめ。」

村の 人たちは、こう 言って、かぐやひめの
ひょうばんを するように なりました。

その ひょうばんを 聞いて

「かぐやひめに、ぜひ 会って みたい。」

「二目でも よいから 見たい ものだ。」

と、とおくからも 大ぜいの 人が あつまって

きました。

(新漢字 美)

(050. jpg 挿絵あり)

かぐやひめは

「わたしは、そんなに 言われ

るほどの ものでは ありません

せん。」

と 言 っ て、 た れ に も 会 い ま
せ ん で し た。

か ぐ や ひ め の ひ よ う ぼ ん は、
み や こ ま で つ た わ り ま し た。

と の さ ま が そ れ を 聞 い て、

「 そ ん な に や さ し く て 美 し

い か ぐ や ひ め に、 わ た し も

ぜ ひ 会 っ て み た い。」

と 言 っ て、 使 い の も の を

や り ま し た。 け れ ど も、 か ぐ や

ひ め は 使 い の も の に も

会 い ま せ ん で し た。

か ぐ や ひ め が、 竹 の 中 か ら

生 ま れ て 二 年 た ち ま し た。

そ の 年 の 春 の こ ろ か ら

で す。 か ぐ や ひ め は、 月 を

(新漢字 使 春)

(051. jpa ㊦)

見 る と、 か な し そ う な か お を す る よ う に な り ま し
た。 お じ い さ ん と お ば あ ち ん は、 心 づ け して、



「どうしたのですか。そんなに かなしそうな かおを
して。」

と たずねました。けれども かぐやひめは、

「何でも ありません。」

と ことえるだけでした。

ところが、十五夜が 近づくと、かぐやひめは、
声を たてて なくようになりました。

わけを 聞いて みると、

「今まで 話してませんでした。わたしは、この 国の
ものでも ありません。月の みやこの ものです。

この 十五夜には、月の みやこから むかえに
来ますので、おわかれしなければ なりません。

それが かなしくて ないて いたのです。」

と ことえました。

おじいさんと おばあさんは、それを 聞いて、
たいそう おどろき、かなしみました。

何とかして かぐやひめを、月の みやこの 人に
わたさないように しようと、そうだんしました。

(新漢字 夜)

とのさまに おねがいして、
たくさんの けらいに、家を
まもって もらう ことじ
しました。

いよいよ、十五夜の 日に
なりました。

とのさまの けらいが、
大ぜい やって きました。

刀や ゆみやを 持って、家の
まわりを すきまも なく
かこみました。

おばあさんは、かぐやひめを
しっかりと だいて いました。

おじいさんは、その 前に
立って ばんを しました。

日が くれました。まるい
大きな 月が、東の 山から
のぼって きました。

しばらくすると、あたりが
ひるのように 明るく

(新漢字 刀 東)



なりました。どこからか、美しい音楽が聞こえて
きました。金色の車を引いた、大ぜいの天人たち
が、雲にのっておりてきました。

けらいたちは、やをいようとしましたが、目は
くらみ 手足の力はぬけてしまいました。

おじいさんと おばあさんに、まもられていた
かぐやひめは、いつのまにか 天人に かこまれて
しまいました。



かぐやひめは、今は 仕方がなくて、ないて いる
おじいさんと おばあさんに、

「たいそう おせわになりました。ごおんは
けっして わすれません。月の 明るい ばんには、
どうぞ わたしの ことを 思い出して ください。」
と 言いました。

かぐやひめは、なきながら 天人の 持って きた
きものに きかえました。

あたりは、いっそう 明るく なりました。

車に のった かぐやひめは、大ぜいの 天人と
いっしょに、しずかに 天へ のぼって いきました。
月の みやこの 美しい 音楽も、だんだん とおく
なり、とうとう きえて しまいました。

(新漢字 車 人 雲)

ページ	ことば	ページ	ことば	ページ	ことば
35	……なければ	47	ていねい	59	はだし
36	入り口		めぐり(めくる)		かならず
	はって(張る)		こんきよく	60	しかり(叱る)
	はりふだ		さしえ	61	あま
	げた	48	しょくぶつえん		ま
	やれやれ		つれて(連れる)	62	うわあ
	ぬがなければ	50	まつ(松)		あわてて
37	まちがい		まつ葉(松葉)		ふり向く
	ふたえ(二重)		みつ葉(三葉)		どなり(どなる)
	じゅず	51	大王まつ	63	おちついて
	くび(首)		じゃあ		じゅんじょ
	てくび(手首)		王さま	64	ありさま
38	かきね		見上げ(見上げる)		くわしく
	はちすずめ		ひと休み	65	けいこ
	こっくり	52	水ぎわ		道
39	うさぎ日記		たごぼうず		そのまま
	おす		なあに(何)		書き止めて
	めす		ぬますぎ(沼衫)		屋根
	あきばこ		じめじめ	66	ぎょうれつ
40	金あみ		くさらない		いた(板)
	前足	53	おにごっこ		一つぶ(一粒)
	おく(奥)		たび人の木		はさまって
	にんじん		しゃしん		(はさまる)
	くっつけて	55	せっけん		がまん
	(くっつける)		あわ(泡)	67	しみ
41	おぼえ(おぼえる)		しゃぼんだま		紙くず
	はこ(箱)		ふうせん		かかえて
	つかんで(つかむ)	56	同じ		(かかえる)
	ぶらさげ		めいめい	68	母しゅう
	だいて(たく)	58	くつ先生	69	やさしい
	ピョン ピョン		おいしゃさん		くだもの
42	すみ(隅)		すんで(住む)		お米
	毛		……ほど		かんづめ
	むしって(むしる)		まもなく		にく
44	ゆりかご		十二しちよう虫		せどもの
	きねずみ		血		ようふく
	ゆする		すって(吸う)		おきやく
	ねんねこ		生きて(生きる)	70	ひとまわり
45	ゆれる		やせて(やせる)		いちご
46	しせい		黄色く	71	そうね

ページ	ことば	ページ	ことば	ページ	ことば
72	よこ	85	ほうそうきょく		(かがやく)
	もんだい		音楽		すみずみ
	たて		ほうそう	95	かしこく
73	名まえ		ろうや		(かしこい)
	きょうだい		わるい		ひょうばん
	年上の人		取りこわされ		ぜび
	からい	86	門		一目(ひとめ)
74	しか		王子	96	もの(者)
	たてたい	87	なかよし		みやこ(都)
	あちら		ひめ(姫)		つたわり
	日当たり		はた(旗)		どのさま
75	かり取って		あげ(揚げる)	97	使い
	地ならし	88	いろはがるた	98	けれども
76	れんが		……しながら		……だけ
78	すまない		やさしく(易しい)		ところが
	うんど		さっそく		十五夜(十五や)
	せつせと	89	ゆらゆら		近づく
79	ぐっすり		チョッキン		わけ
	仕上げ		どこやさん	99	おわかれ
80	ねて(寝る)	90	にじ		何とかして
	とびおき		だいぶん		わたさない
	(とびおきる)		字ふだ	100	おねがい
81	かんかん		金ぶ		けらい
	たがい		絵ふだ		まもって(まもる)
	言いはり(言いはる)		かるた取り		いよいよ
82	ねどこ		大すき		やって
	しまう		ふろく		刀
	かみつかれ		工作		ゆみ
	(かみつかれる)	91	かぐやひめ		や(矢)
	つかれ(突く)		竹取りのおきな	102	車
	こすりこすり		きて		天人
	ねむらないで		どれ		いよう(射る)
	べつべつ		ピカッ		くらみ(くらむ)
83	そう(僧)	93	ふどころ		いつのまにか
	ぼうさん		まあまあ		仕方がなく
84	どう(塔)	94	三月(みつき)	103	おせわ(お世話)
	学もん		ふつう		ごおん
	野原		すがた		けっして
	まん中		美しく(美しい)		きかえ(着替える)
	中国		かがやいて		いっそう

空	広	花	汽	長	夏	冬	高	糸	休
貝	早	虫	少	知	林	元	風	作	台
夜	組	村	会	馬	品	町	黒	色	千
何	百	国	名	書	形	竹	毎	思	引
古	玉	毛	切	友	男	地	神	今	太
秋	南	野	北	森	自	正			

おもなことば

ページ	ことば	ページ	ことば	ページ	ことば
4	かご	15	さかさ		東京タワー
5	チョン チョン		でんしんばしら		きんざごおり
6	冬休み		うつり (写る)		あき草
	久しぶり	16	ようさんごや	24	そちら
	たのしそう		ひるすぎ		よろしく
	むね		しんぶん	26	そう
	のぼし (のぼす)		かばん		……たく
7	にあう (似合う)	17	ゆうびんぶつ		しゅうかく
	ようす (様子)		青年会		だいたい
	図画		ゆうびんきょく	27	とう (頭)
	らんこうえん		会かん		ふえて (ふえる)
9	画用紙	18	手つだい		ふとって (ふとる)
	しまった		……だ		二学
	わすれんぼ		でも	30	音 (おん)
	だって	19	ずいぶん		おもり (お守り)
	いなか		むね上げ		文 (ぶん)
	……だもの		ものおき		ぬけ (抜ける)
	かき (掻く)		れんがや	31	のこり (残る)
	……よく		けが		だから
10	しよって (せおう)	20	かすりきず		たいてい
	すすみ (進む)		……だったので	32	なって (なる)
	草木		くぎ (釘)		もの (者)
	つの (角)		ひっかけて		たとえば
	すじ (筋)		(ひっかける)		おおあめ (大雨)
12	虫めがね		やぶった (やぶる)		おおなみ (大波)
	安心		……ぐらい		こおり (氷)
13	じっけん		ぶじ (無事)		どおまわり
	どちら	21	ふかした (ふかす)		ほおばる
	早く (早い)	22	つづいて (つづく)		あらわし (現わす)
	けむり		たいそう会	33	てん (点)
14	字引き		ごご (午後)		まる (丸)
	かりて (借りる)		このあいだ		あせ (汗)
	花びら	23	ゆうらんバス		だらだら
	あつい (厚い)		こうきょ前		……にくい
	もよう		広場	34	では
	はっきり		二じゅうばし		……だろう
	ひも		きねんしゃしん	35	……やすい (易い)

79	79	80	83	84	85	86	86	90	90
戸 <small>と</small>	仕 <small>し</small> 上 <small>し</small> げ	返 <small>かえ</small> し	クカキ ケ国 <small>こく</small>	野 <small>はら</small> 原	音 <small>がく</small> 楽	ムメ ミ門 <small>もん</small>	王 <small>じ</small> 子	全 <small>ぜん</small> ぶ	工 <small>こう</small> 作

94	97	97	98	100	101	102	102	102
美 <small>うつく</small> しく	使 <small>つか</small> い	春 <small>はる</small>	十五 夜 <small>や</small>	刀 <small>かたな</small>	東 <small>ひがし</small>	車 <small>くるま</small>	天 <small>にん</small> 人	雲 <small>くも</small>

今までに ならった かんじ

(1) 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十
日 小 木 下 川 大 上 月 子 手
足 中 牛 人

(2) 石 方 出 水 赤 青 土 口 夕 走
目 耳 左 右 女 光 外 見 声 力
本 火 白 立 金 犬 入 山

(3) 行 田 先 生 年 学 校 音 合 雨
天 气 車 步 半 分 平 回 前 字

45 カナリヤ カナリヤを主題とした短い児童文。短い中に子どもらしい観察描写があることに気付かせたい。「目をパチパチさせて」「チョンチョンとんで」「山にかえりたくて、なくのでしょうか」など。

610 冬休みが すんで 新学期がはじまった日の学枚風景を書いたもので、児童たちが、冬休みの経験を話し合っている情景は理解し易いものと思う。新出文字12字を教え、書写能力を養う。各自の経験を発表させる。

二 何で しょう ものの属性や、環境を提示して、そのものを的確に当てさせ、児童の思考力をねり、理科的な興味を起こさせようとする。

1215 虫めがね のぼるくんが雑誌を見て、虫めがねの実験をしている文で内容を読み取り、虫めがねに親しみをもたせ、各自に実験させたい。簡単な実験など雑誌その他の書物などにより興味を持つように指導したい。

1621 ようさんごや あきらくんの村の相互扶助関係を読み取らせる。各自の町村の相互扶助について話し合う。「ゆうびんぶつ」「青年会」「ゆうびんきよく」「会かん」「ようさんごや」「むね上げ」「ものおき」「れんがや」「かすりきず」「ぶじ」などの語を理解させる。

2229 手紙 やや複雑な手紙の内容を読み取り、手紙文を書く能力を養う。

身辺の状況を簡単な手紙文にまとめる練習をさせる。

3032 長く のばす 音 長音の書き方を教える。ひ

らがなには長音記号を用いないことを指導する。類語を出して指導する。

30～35 「てん」と「、まる」説明文の読解力を高め、句とう点について正しい理解を与えて、句とう点を正しく使うことを教える。

38 おばあさん 韻律の楽しさを味わわせ、詩特有の表現に慣れさせ、詩への興味を起こさせる。

39～43 うさぎ日記 前巻きゆうりの日記(植物)からうさぎの日記(動物)に進んだもので、動物飼育の楽しさを読みとらせ、日記をつける興味を起こさせる。観察の細かいところ、愛情の表われているところなどを注意させた。進んで動物飼育への興味を持たせたい。

44～45 ゆりかごの うた 子供らしい子守歌を楽しく読ませる。何回も読ませて情感を味わわせる。

46～47 お話を きく ときは。本を 読む ときは。お話をきくときの態度。

本を読むときの態度を指導する。箇条書きの文に慣れさせる。

48～53 しよくぶつえん 全文を読んで、場面を考えさせ、植物の知識を深め植物に親しみを持たせる。身近の植物を研究する態度を養いたい。

54～57 つづいて 思い出す ことば 連想によって次々に名詞を想起させて語いをふやし、連想の能力を高める。

58～62 くつ先生 ブラジルに多い十二指腸虫症の知識と、予防法を教える。

63～64 お話を する ときは。文を 書く ときは話をするときと文を書くときの態度を教える。話し方、作文の実習をさせる。

65～67 見た ことや した こと 短い文を書く練習をさせる。教室やへやの中など場所を限って、取材させる。気軽に書きとめる態度を養いたい

68～71 フェイラ フェイラは買物の場として親しみやすいものである。そのフェイラの情景を読みとらせ、店の種類、品物の名を教える。

72～73 ことばさかし 興味あるクイズ遊び。箇条書きの文を理解させ、クイズを考えさせる。他のクイズを持ちよったり、作ったりして発展させる。

74～82 しかと オンサ 長文読解の能力を高め、明読と、黙読の仕方を教える。文段に区切って内容をまとめさせる。紙芝居・劇などに発展させたい。

83～87 アイウエオの 話 物語の中でかたかな清音とあいうえ表を的確に覚えさせる。全文を読み通したあと、全体をまとめて話させる。

88～90 いろはがるた ニッポンゴ(1)のかるたを一步進めたもので、かるたの作り方を理解し(名詞・形容詞・動詞・副詞の使い方)実際に作らせる。

91～104 かぐやひめ 古くから親しまれている「竹取物

語」をこの学年の児童向になおしたもので、長い物語を読み通し、内容を確実につかませる。

「おきな」「ふところ」「かご」「たからもの」「ひょうばん」「みやこ」「とのさま」「十五夜」「けらい」「まもる」「すきま」「天人」目はくらみ」などは理解しにくいことばで、補足して教える。

先生と父母へ

この教科書は、「にっぽんご(3)」に続いて「読む」「書く」力を伸ばしていくとともに、要点をのがさず「聞く」「話す」態度を養うことを主眼として、編集しました。

児童もこのころになると社会生活への関心が、しだいに高まってきます。

そこで取材の範囲を、児童が社会との接触面で経験すると思われるところまで広げました。またそれらが、言語の学習に役立つよう留意しました。

なお漢字及び語いは日本現行教科書よりも高度のものを提出してあります。

文章 児童の言語発達の段階を考え、説明文・報告文・会話文などいろいろの表現形式を取りあげて、その形式に慣れさせるように留意しました。

文字 新出六十五字。読替十九字。

内容 社会科、理科に属する題材が多くなっています。特に衛生の面では十二指腸虫を取りあげました。童話はブラジルと日本のものを掲げ、興味深く学習できるようにしました。

監

修

林

実

元

元文部省図書監修官

(在東京)

編

集

執

筆

(A

B

C順)

古

野

菊

人生

藤

千

恵

子

親

夫

夫

岡

崎

由

夫

夫

武

本

由

夫

表

紙

挿

絵

(A

B

C順)

星

ル

リ

弘

半

田

知

雄

尾

形

菊

枝

土

城

卓

治

渡

屋

韶

優

士

邊

玉

屋

にっぽんご(4)

一九六〇年十二月十五日 印刷
一九六一年一月 発行

定 価

著 者 日 伯 文 化 普 及 会
日本語教科書刊行委員会

発 行 者 日 伯 文 化 普 及 会
ブラジル、サンパウロ市
サン・ジョアキン街三八一

印 刷 者 東京都千代田区神田神保町三ノ二九
株式会社 帝國書院
代表者 森屋紀美雄

発 行 所 日 伯 文 化 普 及 会
ブラジル、サン、パウロ市
サン・ジョアキン街三八一

